

## 第5 分科会『若者たちの仕事おこし コミュニティに関わって』

「高卒無業者」「大学不登校」「引きこもり」「フリーター」等々、学校を出て就職し社会人になる、というのが若者たちの間では、必ずしも一般的なストーリーではなくなりつつあります。若者と社会との関係は時代により変わってきていますが、今ほど自分が「働く」「社会に出る」ことに積極的なイメージを持ってない時代はないのではないのでしょうか？

日経連が95年に出した『新時代の「日本的経営」』に代表されるように、企業による雇用そのものが多様化・流動化しており、これまでのような人生設計や職業に対する考え方も大きく転換しなければならなくなっています。また、超氷河期と呼ばれる厳しい就職活動をくぐりぬけてようやく就職した会社も、数年のうちに退職・転職する割合も増えており、長引く不況もあいまって、現在、若年層の潜在的な失業率は、平均失業率を大きく上回っています。

しかし一方で、「社会のため」「地域のため」「人のため」役に立つ仕事がしたい、自分らしく働ける仕事がしたいと望む若者は多く、阪神淡路大震災等で注目された若者のボランティア活動への参加も目立ってきています。「自分らしく」というキーワードをよく耳にしますが、「会社」人であることが「社会」人であるという前提は崩れた今、地域のコミュニティの中で、いかに自分の居場所を見つけて生きていくか、がテーマとなってきました。

この分科会では、自分の住む地域にこだわり自分らしい生き方、働き方を模索している若者が参加して、実際にコミュニティに関わって仕事に取り組む方々を招いて、お話を聞き、経験を交流することを目的とします。ただ、現状では若者が自ら仕事や働き方を切り拓くことは相当な困難を伴い、ただ「スゴイ能力を持った人」だけに可能なことになりがちです。行政はベンチャーや新規分野の支援や助成は行っていますが、若者の地域おこしや仕事おこしに直接的な支援は政策化されていないようにも思います。

ヨーロッパ等では、若年失業率の上昇は一つの大きな社会問題化しており、各国やEUによる政策としての若者の仕事おこし支援プログラムも沢山あるようですが、日本では、近年、労働省の政策課題として掲げられてはいるものの、今だ具体的にはあまりありません。

企業のなりふり構わぬリストラや労働環境の悪化といった働くことへのマイナスイメージは、10年後20年後を見据えて地道に努力するよりは、いかに一瞬一瞬の今を楽しく生きていくか、という思考に若者たちを走らせているように思います。若者と社会をつなぐ仕組みづくりと、若者の就労や仕事おこし支援を公共的な政策課題としてこの分科会で認識を深め、政策提起も含めたアピールを外部に向かって行うことも、目的の一つとします。

(文責菊地)

パネル形式で報告を行った後、質疑・討論を行う予定です。